

「やかた」改修から始まる天理のこれから

1250150
指導教員

舩谷豪 1*
高野洋平

都市計画
天理

屋根
改修

医療
宗教

1. 背景

奈良県天理市は日本唯一の宗教都市として発展してきた。市の中心部は天理教関連施設が集中しており、まちの景観を形作っている。しかし近年の宗教に対するイメージや政治との関わりの中で都市に対しての影響力とは裏腹に社会システムから放置されていると感じる。しかしこれからの天理のまちを考えたときに宗教施設や市役所などの公共施設、住宅が入り混じる天理で建物用途に縛られない建築を考えることは今ある資源を活用することにつながり、公共事業や資本主義の論理を超えたまちづくりができると考える。そこで本設計では既存の使われていない宗教施設などを改修することで宗教から始まる新たな公共性を見出す。

1.1 天理教の現状

奈良県天理市に本拠地を置く天理教は江戸時代後期に成立した宗教法人である。ピーク時には 300 万人から 500 万人を超す信者数であったが、現在文化庁の『宗教年鑑令和 5 年版』によると 1,151,639 人となっており、減少傾向が続いている。

また 1954 年から始まった「おやさとやかた構想」と呼ばれる都市計画が続いており、天理の景観の一部となっている。「おやさとやかた構想」とは天理市にある天理教の聖地「おば」を中心として 1 辺約 900 メートルとする正方形の外周部を「おやさとやかた（やかた）」と呼ばれる建物で囲う計画である。学校や病院などが入居しているその「おやさとやかた」は現在全体の約 38% が完成しているが 2005 年以降の竣工はなく、反対に耐震工事の必要や入居していた学校が閉校したことにより空いている建物が出てきており、今後の活用も決まっていない。



図 1 左) おやさとやかた（北西部）右) 赤が完成部

1.2 天理市の現状

名称が天理教に由来する天理市は誕生した当時、自らを「宗教文化都市」と位置づけ市民憲章などでもその性格を強調している。現在でもマスタープランのなかで宗教文化都市として「天理らしいまちづくりの実施」を目標とされているがそれ以上の具体的な政策は特になく、それよりも福利厚生の実施や神社などの観光資源の活用などに力をいれている。しかし都市計画的に天理市全体を見てみると天理駅周辺の一等地は天理教関連施設が密集しており、天理市としては土地利用しにくい状況となっている。また「おやさとやかた」に入居している博物館やホールなどは誰でも利用することができるが周囲との関係性が薄く、内に閉じたものとなっている。

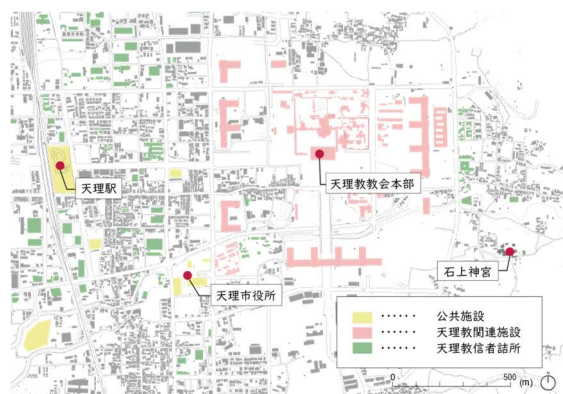


図 2 天理駅周辺の天理教関連施設

2. 目的

使われていない「おやさとやかた」を中心に計 3 か所の改修を行い、それぞれ隣接するエリアの特徴である医療、教育、防災の課題を解決することで宗教施設としての機能を超えた横断的な地域の活性化を促すことを目的とする。天理教にとっては社会と関わりをもつ窓口のような空間になり、天理市民にとっては土地利用や地域民の活動の範囲がより広がる空間になることを目指す。

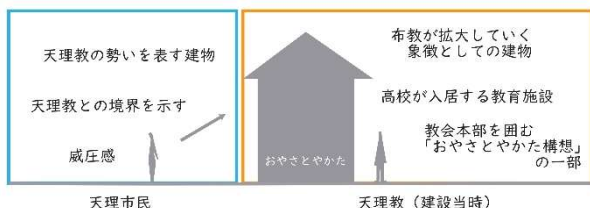


図3 おやさとかかた竣工当時のイメージ

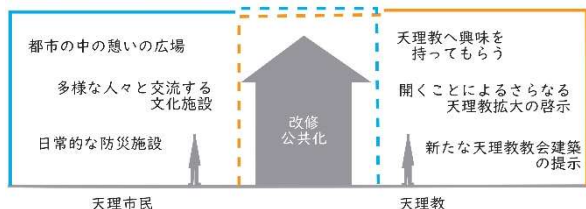


図4 本計画により実現するメリット

3. 対象敷地

敷地は、奈良県天理市の中央部にある「おやさとかかた」とその周囲である。その中でも周囲の施設や環境との関係をもつ医療、教育、防災の3つにテーマを絞ってそれにふさわしい場所を選定し、それぞれの分野で現在の状況では活用しきれていない部分を補う形で改修を行う。

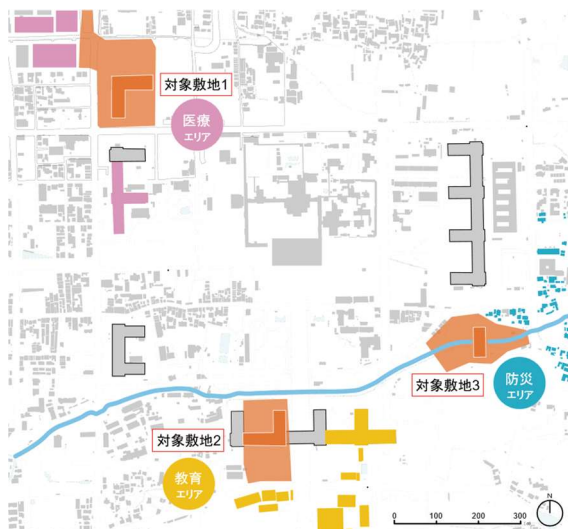


図5 対象敷地配置図

4. 設計手法

既存の「おやさとかかた」を改修するにあたって不特定多数の人が利用し立ち寄れる空間をつくる。そのためには壁的な存在である「おやさとかかた」内での活動を外部にあふれ出るようにし、さらに外部も特定の建物、機能を構えないことでどこからでも出入りできるようにする。自由な活動ができる空間をつくるために今回は大屋根とボリュームダウンという手法によって設計を行う。

4.1 大屋根

周囲の地形や導線などに合わせて形づくり、低層部におおらかで流動的な形を形成する。屋根下を暗く、重い印象に持たせないために木のルーバーによる屋根を設計する。



図6 大屋根のイメージ

4.2 ボリュームダウン

「おやさとかかた」の中の活動を表出し外部と関係を持つとともに都市の中で新たな導線や視線の抜けを作る。



図7 ボリュームの減らし方のイメージ

5 設計

5.1 対象敷地1：医療エリア

「おやさとかかた」の北西部に位置する棟。「おやさとかかた」の中で角を唯一完成済みの建物でL字型の建築物。周囲には住宅街や病院、公立の小学校があり天理市の都市機能誘導区域に位置している。

5.1.1 課題

2023 年まで学校法人天理教校学園が運営する高等学校が入居していたが閉校し、その後の使われ方は決まっていない。

病院や住宅街が多くあるこの地域では病院と連続した広場を計画する。既存の「おやさとかかた」には、現在何も入居していないため新たに日常的な健康管理のための散歩コースなどを日常のケアスポットを挿入する。



図8 対象敷地1周辺図

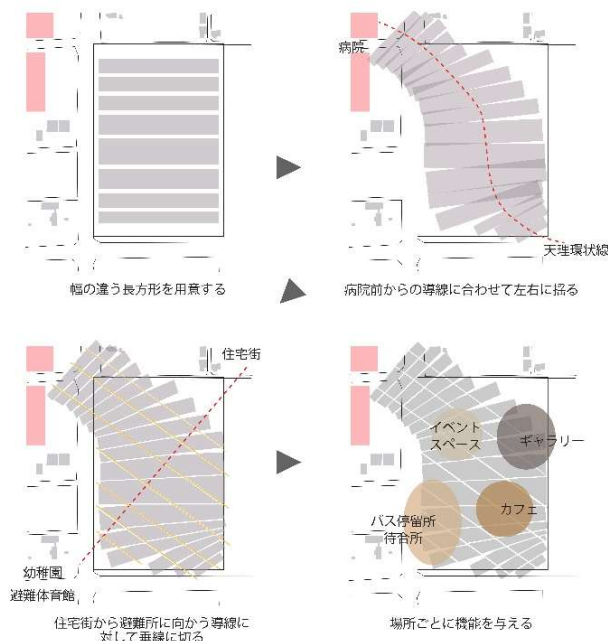


図9 対象敷地1での屋根の決め方

病院の前からのアプローチを意識した屋根。敷地を超えた関係性を作り、どこからでも立ち入ることができる。



図10 病院前から広場を見る

既存の吹き抜けや広場が見えるよう2階の壁を取り払い、広場に向かって大階段を挿入する。



図11 「おやさとかた」内から病院方向を見る

5.2 対象敷地2：教育エリア

「おやさとかた」の南側に位置する棟。現在は「おやさとかた」の一部に、博物館と3.4階に約400席規模のホールなどが入居している。北側には観光客も訪れるイチョウ並木や川が流れ、周囲には高校や大学、小学校があり教育施設が密集している。

5.2.1 課題

現在入居している博物館やホールは入口が分かりにくく、

く、南側の空間も主に駐車場があるだけで日常利用されにくい状況になっている。

また近隣の学生同士の交流も少ないため設計では交差点に近い位置にオープンスペースを設け、多世代間の交流を促す。「おやさとかた」とグラデーションにつながり、流動性のある賑わいを創出する。

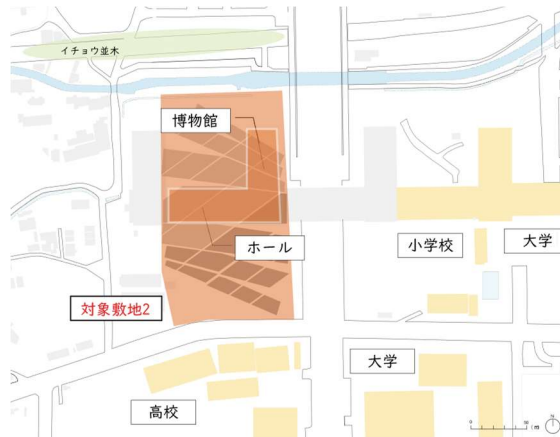


図12 対象敷地2周辺図

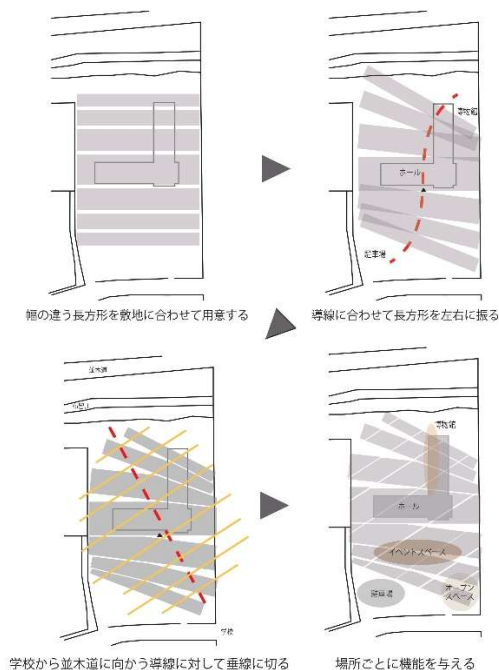


図13 対象敷地2での屋根の決め方

オープンスペースには学生、施設利用者、地域民が集まり「おやさとかた」前では芸術作品の屋外展示も行う。



図14 オープンスペースから「おやさとかた」を見る

博物館の3階西側の壁を取り払い、開放感を高めるとともに布留川、イチョウ並木の眺望空間となる。



図 15 博物館からイチョウ並木
布留川を見る

5.3 対象敷地3：防災エリア

「おやさとやかた」の西側に位置する棟。現在は外国人に日本語教育を行う日本語学校が入居している。「おやさとやかた」のなかで唯一布留川の上に建っており、周囲には住宅街や石上神宮などがある。

5.3.1 課題

布留川河川改修事業資料によると「おやさとやかた」北東部の宅地化に伴い浸水被害の危険性が高まっている。そこで高低差のある対象敷地3を遊水地公園として整備する。石上神宮から駅の方角（天理教本部の方角）に通り抜けるようにし、高低差を活用した集会空間などを作ることによって日常的に川と関わりを持つ場所を提供し、日ごろからの防災意識を高める。



図 16 対象敷地3の周辺図

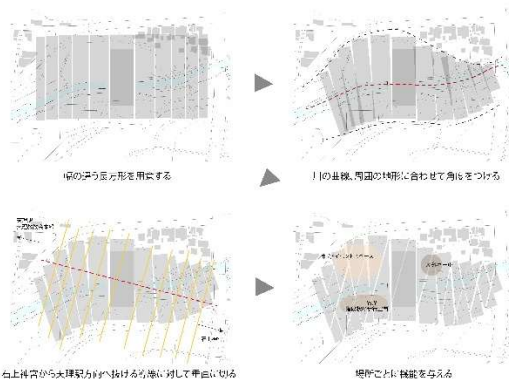


図 17 対象敷地3での屋根の決め方

斜面と「おやさとやかた」に挟まれた空間では外国語学校に通う学生が屋外で発表を行える広場となる。



図 18 「おやさとやかた」東側
階段広場

高低差のある地形、「おやさとやかた」、大屋根に囲まれた公園では安心感のある、包まれたような空間となる。



図 19 西側の公園から「おやさと
やかた」を見る

6.まとめ

空間体験は各々が持つ思想に関わらず経験し、共有することができるものである。したがって都市と宗教が大屋根という形の定まらない空間を共有することは無意識に互いが歩み寄り、天理に関わる人間すべてを巻き込んだこれからの天理を考える場となることになるだろう。

7.参考文献

- 1) 宗教年鑑令和5年度版
https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/hakusho_nenjihokokusho/shukyo_nenkan/pdf/r05nenkan.pdf
- 2) 国土地理院基盤地図情報
<https://fgd.gsi.go.jp/download/menu.php>
- 3) 天理市ハザードマップ
[奈良県災害リスク情報システム](https://www.city.tenri.nara.jp/material/files/group/64/cha-pter3.pdf)
- 4) 天理市都市計画マスタープラン
<https://www.city.tenri.nara.jp/material/files/group/64/cha-pter3.pdf>
- 5) 奈良県河川整備委員会
<https://www.pref.nara.jp/secure/62435/4-02hokuryuu.pdf>